



動物愛護とヒューマニター 第一報：
リスの放飼と動物愛護

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重岡, 義雄 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00001071 |

動物愛護とヒューマニター

第一報 リスの放飼と動物愛護

重岡 義雄

北海道学芸大学農業研究室

Yoshio SHIGEOKA: On some Relations of
Animal Protection to Humanity

内 容

第一報: リスの放飼と動物愛護

第二報: ヨーロッパの動物愛護

第三報: 動物愛護と人づくり

Preface

In England, about 400 years ago began the Education for the Prevention of Cruelty to Animals, which led to the recognition of its importance by all the European countries and America. Nowadays, in Europe and America this kind of education has been carried out as in England.

It is reported that in the 28 states of America the Prevention of Cruelty to Animals is included in the Curriculum of Primary School as a regular course, though slightly differentiated.

In the general estimation of the post-war times concerning the character of the Japanese people, it is pointed out that they are wanting in the love for protection of animals and that it is quite a blemish in their character. The movement for prevention of cruelty to animals has been rapidly conducted throughout the country. However, to my shame I must confess that this movement of ours is very poor as compared with that of European countries and America.

1. は し が き

動物愛護教育が英国で行なわれるようになったのは、約四百年以前のこと、その後、欧米各国では、その重要性が認められ、英国にならって、これを実施しているようである。米国は州によって多少の相異はあるが、初等教育で動物愛護を正課としているのは28州の多きに達している由である。

戦後、日本人の最も欠けているのは、動物愛護の精神であることが指摘され、識者の間において、急速に愛護運動が展開されてはいるが、欧米のそれに比べると誠にお恥しい次第である。

2. 動物愛護の重要性

「動物愛護の精神こそ、日本のヒューマニズムの復興と再建日本の最も必要な要素となるであ

ろう」とは、かつてのヘレン・ケラー女史の言葉である。

我国でも、昭和三十年財団法人として日本動物愛護協会が発足し、動物愛護思想の普及や虐待防止などに乗り出している。

英国を旅行した人の話によると、流石は動物愛護運動の本場だけあって、到るところで感心させられるそうである。特に、日本人旅行者に深く印象に残るものは、ロンドン市のハイドパーク公園での、リスやスズメと遊ぶ子供達のほほえましい風景である。公園が、実によく、清潔に手入れされていることでも、われわれの目をみはらせるが、それにもまして、私共の目にうつるものは、雀が子供達の手のひらからパン屑を貰っている和やかな情景である。また、一方、観光客がベンチに腰を下すと、子供の絵本から抜け出てきたかと思われるような可愛いリスが、ふさふさした尾をピンと立てて、犬がよくやるように、前足をきちんとあげて、餌をくれるのを待っている。このような歓迎(?)を受ければ、どんな人でも何かやらないではおれないそうである。英国人のひろい隣人愛や、深いヒューマニターは、このような環境の中で、幼児の時代から培われていくのではなからうか。

リスを血眼になって追い廻したり、スズメに石を平気で投げつける子供のあいだには、深いヒューマニターがはぐくまれていくことは望み難い。

一昨年、旭川市の常盤公園に、一匹のリスが迷い込んできたとき、公園にいた子供達は無論のこと、大人までが大騒ぎをして、そのリスを追い廻し、結局、リスに安住の地を与えないで、追払うような始末になったそうである。

札幌市でも、美しい花壇で有名な大通公園の逍遙地に、美しい姿の鳩一クジャクバトーを放飼して、大通公園の名物にしよとしているが、心なき人のイタズラがわざわざいして、まだ、よく人に慣れるまでになっていない。このような試みが成功しないようでは、北海道人のわれわればかりでなく、日本人の恥でもあるから、根気よくやりつづけて、うまく行くように、皆んなが協力しなければならぬ。

数年前、日ソ漁業交渉が暗礁に乗りあげて困り抜いていたときに、次のようなことがきっかけとなって、交渉が順調に進展したそうである。それと言うのは、日本側で、交渉が休会になっていたとき、ソ連の代表者を招いて、日本の風物映画鑑賞会を行なったところ、たまたま新潟県の瓢湖で野生の白鳥を餌付けしている場面が出てきた。すると、ソ連の代表者連は、驚きの目をみはって日本でもこのように野鳥に餌付をするのかと、不思議がるやら、感心するやらで、実に和やかな雰囲気醸し出されたそうである。そのとき、日本のある委員が、すかさず『これらの白鳥は、お国のシベリヤから遙々飛んできた珍客であるから、われわれも大切にもてなしているのです』とユーモアをまじえて話をしたところ、その後の漁業交渉が、実に、不思議な位うまくはこんだそうである。

平素、われわれが、なにげなしに、みのがしていることで、欧米人の中で問題となっていることは、日本の子供等が、生きたトンボやセミを籠に入れて遊ぶ行為で、これなどはむしろ大人が協力している有様で、これら野蛮行為は生命尊重の趣旨から言つて、誠に言語同断な悪い遊びで、今後、このような悪い遊びは、是非やめさせるようにしなければならぬ。

欧米諸国の人々は、動物虐待を平気でやる人間は野蛮人であると思っている。それで、われわれが、如何に立派な憲法を作って、文化国家建設のお題目を唱えても、動物虐待が現在のままに放任されては、欧米の人々から、外面上はいざしらず、心からの信頼を受けることはむづかしい。

3. リスと子供の遊ぶ自然公園

旭川市近郊の嵐山や其他には、リスの一種であるシマリスが棲息している。可憐な小動物で人にもよくなれるので、せまい籠の中に押し込めて子供の愛玩用に使っている人もあるが、動物愛護の趣旨から言っても感心出来ない。それで、筆者は奈良の春日公園の鹿のように保護して、子供と仲よく遊べる自然公園を作することを提案するものである。この構想は昭和三十八年七月に、『グレート旭川』の論文の中で発表した。私はこのようなプランの自然公園の第一号を、是非、旭川市かその近郊に作りたい。

リスを餌付けして人になれるようにするには、色々な困難に遭遇することを覚悟しなければならないが、リスの餌付の方法について、北海道大学の動物の先生からおききした点を、ここに要約すると次のようである。

餌付をはじめの場合には、50 cm 位の大きさの台を 30 cm 位の高さに置く。そのとき、台の支へは一本足とし、ネズミの登ってこないように注意する。台の上には、リスの好物である南京豆や南瓜の種子をのせておく。そうするとリスが自然に寄りつくようになり、これを根気よく繰返しているうちに、リスが人にもなれるようになり、遂には子供とも仲よく遊ぶようにもなる。これまでにするには、思はぬ障害にもぶつかるので、辛抱強くやらないと挫折してしまう。

最近、小・中学校で、小鳥の巣箱を作って、野鳥の保護や生態観察をする学校がふえてきたことは、誠に喜ばしい。今後はこの試みを数歩前進せしめて、ヨーロッパ並の水準に高めることを要望したい。

筆者は本年四月下旬にヨーロッパの主要都市を視察するので、第二報の『ヨーロッパの動物愛護』は帰国してから執筆する予定である。

参 考 文 献

日本動物愛護協会編集：動物愛護資料，昭和三十七年出版。

重岡義雄：リスの自然公園，昭和三十九年一月，北海道造園懇話会。